

秋季大会発表要旨

特集

ポスト文学史のアクチュアリティ

——正史解体後の展望

【特集の趣旨】

運営委員会

かつて、文学研究者の夢は自分なりの文学史を編むこととされた時代があり、また「文学史家」という言葉が広く流通していたように、文学研究のなかでも、あるいは教育のなかでも、文学史はその中心を貫くものとして長く位置づけられていた。しかし、状況が変化した今日、文学史の位置づけも大きく変容した。

国家や階級、ジェンダー規範などが批判的に検討されるにつれ、正史（カノン）としての文学史に対する批判がなされるようになってきた。

り、もはや「大きな物語」としての文学史の共有は困難であるという認識が一般的になっている。このこと自体は必然的な流れであったし、「大きな物語」が排除してきた、さまざまな出来事を探究する努力が継続され、「正統」な文学史の陰に埋もれていた多種多様な文学の姿が明らかになったことは重要な成果である。こうした多様性の発掘の一方で、近年は人文科学系学問領域の相対的な縮小や、文学愛好者の嗜好の拡散化も進行しており、もはや共有される文学史など成立しないと捉えることも可能であろう。

しかし、たとえば教育的な場面においては、文学史が一定の水準で要請され続けている現実もある。また、研究現場においては、感性や想像力への偏向によって覆い隠されてき

た、文学と政治や市場のかかわりを問い直すため、いっそう自覚的に歴史と接続すべきとの問題意識も提示されている。そうした現状もふまえたとき、書き直された文学史を、かつてのように多様性と背反するものとしてではなく、より積極的に捉える視点もありうるだろう。

このように、文学史がいったんの終焉を迎え、別のアプローチによる文学の歴史記述が試みられている両義的な状況を、本企画では「ポスト文学史」と呼び、この視座から研究の現状に検討を加えたい。従来の文学史の見落としを実践的に示してきた論者や、近代文学研究自体の歴史性を俯瞰的に把握し直し、あるいは積極的にオルタナティブな文学史を提示してきた論者を迎え、文学史の変容の実態や、方法の意義、今後の展望を問う。もとより本企画は、統一的な文学史の再興を目指すものではない。単純な要／不要ではなく、研究の存続と発展を見据えて文学の歴史をいかに描けるか、建設的な議論の場となることを期待したい。

「明治文学談話会」と文学史

—「学問史」の視点から—

中山 弘明

り同年に組織された「明治文学会」と並行しながら、短期間に極めて活発な研究活動を行った。前年あたりから東大出身の塩田良平・神崎清・篠田太郎らが、藤村作、久松潜一会長格としつつ、近代文学研究の本格的組織の立ち上げを計画しようである。のちに「イデオロギーの理由」から、神崎・篠田らが離

「明治文学談話会」という組織がある。吉野作造の著名な「明治文化研究会」の発展的集団であり、言わば「日本近代文学研究」の源流として光が当たりつつある。早くは関井

光男、小森陽一らの言及も既に出ているが、本格的な調査は未だしといつてよい。とりわけ今回のシンポジウムのテーマである「文学史」の視角からは、新たな検討が必要と思われる。「文学史」に別の「文学史」を対案として立てることは、今回は控えたい。むしろ「文学史」という概念を問い直すべく、一つの「起点」に注目することで、我々が長年携

その発展形として「明治文学懇話会」がある。機関誌「明治文学研究」の発刊、本格的な研究発表、作家の書誌調査や古老からの聞き取り、講演会を組織的に行い、北村透谷・二葉亭四迷・石川啄木らの研究の基礎を作った。それだけではない。例えば神崎は、会の講演での木下尚江の言葉に刺激され、戦後、大逆事件研究や基地、売春婦のルポにも踏み込んでいく。またこの会には「金ポタンの学生」として、平野謙・本多秋五・吉田精一らも参加していた。時代を考慮すれば、ここでの「イデオロギー的」が講座派の唯物史観を指すことも明らかだ。また機関誌の創刊の辞には「僕たち文学史家」、「明治文学史の再現」の言葉も明瞭に見えている。今回の報告では、こう

した「明治文学談話会」の活動調査を踏まえ、先の大逆事件他の問題の端緒を探りながら、文学史叙述の一つの様態を提起したい。

文学史は表現に内在する

安藤 宏

「明治文学談話会」という組織がある。吉野作造の著名な「明治文化研究会」の発展的集団であり、言わば「日本近代文学研究」の源流として光が当たりつつある。早くは関井光男、小森陽一らの言及も既に出ているが、本格的な調査は未だしといつてよい。とりわけ今回のシンポジウムのテーマである「文学史」の視角からは、新たな検討が必要と思われる。「文学史」に別の「文学史」を対案として立てることは、今回は控えたい。むしろ「文学史」という概念を問い直すべく、一つの「起点」に注目することで、我々が長年携わってきた「文学研究」に客観的な光を投げたいということが発表の基本的コンセプトである。〈学問史〉という言葉を取って用いたのもそうした意図である。

まず「明治文学談話会」のあらましに触れておく。設立は昭和七（一九三二）年。やは

り同年に組織された「明治文学会」と並行しながら、短期間に極めて活発な研究活動を行った。前年あたりから東大出身の塩田良平・神崎清・篠田太郎らが、藤村作、久松潜一会長格としつつ、近代文学研究の本格的組織の立ち上げを計画しようである。のちに「イデオロギーの理由」から、神崎・篠田らが離

企画の趣旨文に「かつて、文学研究者の夢は自分なりの文学史を編むこととされた時代があり」という文言があり、少なからぬ衝撃を受けた。実は私自身、これまで、そして今もげんにそのような「夢」を熱烈に抱き続けている一人だからである。私はいつのまにか、なすべからざることをしてしまっていたのだろうか？ あるいはこの数十年、浮き世離れた研究を続けているうちに浦島太郎になっ

た。この「起点」に注目することで、我々が長年携わってきた「文学研究」に客観的な光を投げたいということが発表の基本的コンセプトである。〈学問史〉という言葉を取って用いたのもそうした意図である。

まず「明治文学談話会」のあらましに触れておく。設立は昭和七（一九三二）年。やは

た。この「起点」に注目することで、我々が長年携わってきた「文学研究」に客観的な光を投げたいということが発表の基本的コンセプトである。〈学問史〉という言葉を取って用いたのもそうした意図である。

私の実感で言えば、かつて近代文学に関する「正史(カノン)」が存在したことなど、ただの一度だつてなかった。少なくとも魅力的な文学史は、常に個人の肉声として語られてきたものだと思っている。いや、「肉声」という言い方は誤解を与えるかも知れない。

目の前にある具体的な対象の特質を明らかにするために、「そうであるもの」と「そうでないもの」との比較対照を繰り返すうちに、問題はおのずと表現史に行き着かざるを得なくなるのである。その意味でも「文学史」は常に部分の中の全体であり、全体の中の部分である。ある一つの表現の持つ一回性と必然性を合わせ見る複眼、とでも言ったらよいのだらうか。必然であるからこそ偶然性、特殊性も際立つわけで、「表現に内在する文学史」こそは、研究の永遠の課題なのだと思つてゐる。

意図は右の志を述べることだけにあるので、これまでも書いてきた、あるいはまた、すでに広く知られた事象(芥川龍之介、志賀直哉、太宰治等々……)を例示するにとどまるが、あくまでも発想のたたき台をお示しする、ということでご寛恕頂きたいと思う。

「文学非力説」論議の位置・意義・ 圏域

松 本 和 也

私事から恐縮だが、これまで「文学史」なるものについて、正面から考える機会をもたないままに、また、本務校で「文学史」の授業を担当することもないままに、今日に至っている。それゆえ、「文学史」それ自体を対象として何事か問題提起をすることは、ましてや「ポスト文学史」となればなおのこと、荷が重い。今回は、「文学史」なるものを問い直す契機たり得るのではないかと思われる議論を示すことで、報告にかえたい。

そこで、近年集中的に取り組んでいる「昭和一〇年代の文学場」をめぐる諸問題の一環として一つのトピックに注目し、(よくもわるくも)これまでの研究スタイルによる調査・分析の一端を示すことを通じて、「文学史」について考える何かしらの材料を提供できればと考えている。具体的には、拙著「昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・

戦争文学」(平成二七年)の延長線上で、今回は高見順の発言を端緒とする「文学非力説」論議(昭和一六年)に注目してみたい。一般に「文学非力説」論争と称されることの多いトピックではあると思うが、この議論に関わった主要テクストの書き手(高見順、尾崎士郎、長谷健)および当該テクストに対象を限定せずに、ひろい視座を確保するため、ここではそう呼びたい。というのも、「文学非力説」および一連の議論に書きこまれた論点は、先行研究(奥出健氏)にも明らかにならず、前後する時期の文学場において、さまざまに論及されてきたばかりでなく、逆に昭和一〇年代のとみなしうる私小説、時局下の文学(者)、拡大する領土、文化工作等々、複数の問題領域が流れこんだものでもあるのだから。

してみれば、「文学非力説」論議に走るさまざまな線やその交錯を読み解いていく作業とは、昭和一〇年代という限られたスパンについてではあるが、「文学／史(歴史)」について考えるための契機にもつながっていくのではないか——これが現在の見通しである。

空白の「文学史」を読む

——『政治と文学』にみるジェンダー・ポリティクス

中 谷 いずみ

「文学史」は、「文学」の定義や評価をつねに孕むものである。その定義や評価は、当時の文壇やメディアを含む受容言説、後世の批評家や研究者による整理など、捉える者の立場や時代によって変わるものだろう。また、社会的規範や主流的価値観等の影響から完全に逃れ得る立場などあり得ない。いま私たちが「文学史」を捉え直すとするれば、史を編む主体のまなざしを問うことが必要なのではないだろうか。

その一つの試みとして、本発表では「文学史」をジェンダーの観点から捉え直してみた。ここでは、一九四六年から四七年にかけて繰り広げられた「政治と文学」論争、特に、のちに「昭和文学史」を編むこととなる平野謙の批評を出発点としたい。平野は、小林多喜二「党生活者」のハウス・キーパー表象や

杉本良吉と共にソ連へと越境した岡田嘉子などを女性を犠牲にした例としてあげ、マルクス主義芸術運動の政治優位を批判した。その際、女性が受動的な被害者としてしか想定されていないことについては、中山和子や藪禎子が痛烈に批判した通りである。

本発表ではそこから更に歩を進めて、戦前に政治運動に関わって言葉を紡ぐ主体として存在した女たちに目を向けることで、『政治と文学』という枠組み自体を問い直したい。例えば、ハウス・キーパーや投獄を経験し、作品執筆という面では空白の期間を有する中本たか子のような文学者や、彼女の発表媒体でもあった雑誌『女人芸術』（一九二八—一九三二年）に集った女たちの言葉から照射した時、「文学」はどのような広がりをもった行為として見えてくるのだろうか。平野が無意識に想定していたような、公／私や能動／受動、主体／対象といった性的差異の比較が見えなくしてきた女たちの政治的かつ文学的営為に目を向けることで、『政治と文学』の、ひいては「文学史」のジェンダー・ポリティクスについて考えてみたい。

秋季大会研究発表

第一会場（15A教室）

個人発表

夏目漱石の『それから』と〈自己卓越〉

——『文学論』の〈悲劇論〉を中心として

朴 珍 娥

漱石は『文学論』の〈悲劇論〉で悲劇の三要件を整理した。第一は〈活力停止〉である。悲劇は劇が始まる前に観客を暗い劇場に集まって座るようにして、観客に圧迫された身体を通じて〈活力停止〉を感じさせる。第二は〈冒険本能〉である。悲劇では通常の状態より強い身体的な圧迫を感じる観客に普通は接しがない（生死の大問題）を舞台で見せる。

そして観客は自分の身体的な圧迫を劇の事件に集中することで忘れるようになる。第三は〈自己卓越〉である。悲劇は、主人公の能力では解決できないほど〈生死の大問題〉が大きくなるにつれ、結局、主人公が敗北する結末を迎える。しかし、主人公と自分を同一視するようになった観客は、最後まで問題に立ち向かった主人公の強い精神力に注目するようになり、このような主人公の精神的な勝利を自分の成熟として受け入れるようになる。

けれども、漱石はこのような〈自己卓越〉の過程を説明しながらも、これを〈吹聴〉と表現し、否定的な態度を見せた。主人公に自分を移入することで、自分自身の存在を忘れ、主人公の成長を自分のものとして受け入れる悲劇の構造が大衆を扇動する可能性があることを把握したからである。

したがって、漱石は自分の作品を通じて、このような悲劇の要素を変形し、読者が能動的に読書という行為を進めるように按配した。『それから』は最初の場面から激しい身

体的なヒステリーを経験する代助の状況を示している。読者はその原因を推理し、この推理を通じて自ら自分の活力停止を解消するようになる。これにより、読者は代助に自分を移入する代わりに、自分の判断力の存在を再発見し、自分の判断力で代助を評価するようになる。要するに、漱石は『それから』で悲劇の要件の変形を通じて、読者が自分の判断力から快を感じ取るようにした。

森三千代の「病薔薇」における日中女性同士の繋がり

——自由・愛・夢のために

楊 佳 嘉

本発表では、森三千代（一九〇一—一九七七）の小説「病薔薇」（「桃源」創刊号、一九四六・一〇）を取り上げ、そこに描かれている主人公である龍子が上海で女子高等師範時代の級友である中国人の朱薔薇姉妹と再会する物語をめぐって考察を行う。

この小説は戦後間もなく、一九四六年に発

表されたが、実は森三千代の一九二〇年代後半の放浪の旅における上海生活をモチーフにした小説であることが先行研究ですでに言及されていた（趙怡「森三千代の上海—金子光晴と放浪の旅へ」、『駿河台大学論叢』三四、二〇〇七）。本発表において、まずこの小説

が一九四六年という時点で発表された原因と意義を探り、森三千代の当時の上海生活と中国女性作家である白薇の交流活動を考察したうえで、小説の分析を展開していく。次に、

作品を分析する際には、上海という交流のトポスの機能、朱薔薇の病の表象、朱薔薇姉妹の対比、彼氏・夫の不在、朱薔薇姉妹から刺激された龍子の心象風景をめぐって考察する。さらに、以上の考察を通して、彼女たちが共有する自由・愛・夢というものは、近代化の文脈のなかでどのように位置づけられたのか、検討を試みたい。最後に、東アジアの近代化の過程において、日中女性知識人がいかにジェンダー規範を超えて発信したのか、いかに国境と民族を超えて交流を実現したのか、その女性の経験が再生産される様相を明らかにしたい。

この研究によって、国際的、越境的に近代

東アジアにおける文化的「知」を生産する日中女性知識人の多様性と複雑性を究明することを目的とする。

「 $\sqrt{-1}$ 」の存在論

—夢野久作『木魂』の怪奇表象

加藤 夢 三

夢野久作『木魂』（ぶろふいる）一九三四・五）は、同時代の数学教育に対する批判的な視点が散りばめられた小説である。昭和一〇年前後の算術教育論においては、主として日常の経験に根ざした生活主義的なカリキュラムの体系化が叫ばれていたが、『木魂』の主人公は、むしろ徹底的に抽象化された数理世界へと没入することによって、現実を認識する枠組みそのものを覆ってしまうような思考の可能性を数学に求めていた。

だが、そのような演繹的な知性に偏重した判断のあり方を追究する主人公の態度は、自らが驟死する運命をたどるだろうという根拠のない「予感」と背馳するものである。『小

学算術』を編纂する学校教師である主人公は、「あらゆる不合理と矛盾とを含んだ公式と方程式」を手がかりに眼の前の世界を秩序づけていくことで、思惟によって身の周りの自然現象を仮構しようと試みるのだが、同時に数理世界の内側から去来する「声」の幻聴に悩まされ、やがて自らの初発の「予感」をなぞるようにして自死を遂げることになる。このようにまとめてみれば、『木魂』の物語構成は、直観を根拠づけるために要請されたはずの数学的な思索のなから、おのずと怪奇的な表象が立ちあらわれてしまうまでの過程を形象化したものとして解釈することができる。

また、『木魂』が掲載された雑誌『ぶろふいる』では、創作活動と並行して、探偵小説の秩序を支える理性のあり方について、自己言及的に批評する試みが重要視されていた。そのような雑誌メディアの性格、ならびに夢野が同時期の評論・随想のなかで示した探偵小説や怪奇小説についての見方を踏まえてみれば、数理的な記号の羅列によって術学趣味を掻き立てようとする『木魂』の語りには、直観に対して思惟が優越することで不可避的に生じてしまう認識の欺瞞を、怪奇表象の生

成原理という観点から肯定的にとらえなおすすめ。そのため視座が内包されていることが了解できる。

パネル発表

「他者」と共同性

——戦後日本のスピリチュアリティ

表象——

加島 正浩・木下 幸太・泉谷 瞬

(デイスカッサント) 柳瀬 善治

一九六〇年代以降、ニューエイジやスピリチュアリティの形成を説く運動が興隆してきた。島蘭進は全世界的に宗教に対して靈性という観念が立ち上がっていると述べる(『精神世界のゆくえ』、二〇〇七)。しかし欧米における靈性がキリスト教や主流の宗教伝統とは異質で、既存の文化的権威に挑戦する側面を持つのに対し、日本においては主流の文化伝統に近く、知識人層から潮流の担い手や共鳴者が輩出されている特徴があり、日本における独自の展開には注意が払われねばならない。

日本の靈性文化はリゼット・ゲバルトが指摘するように一九八〇年代以降に生じるネオ・ナシヨナリズムの流れに合流し、個人化を反映するポストモダンのスピリチュアリティ文化、とりわけオカルトや精神世界の興隆として表面化した。そして河合隼雄、中沢新一などの知識人、宮内勝典や吉本ばなななどの小説家、坂本龍一や横尾忠則などの芸術家などに広く展開し、小松和彦による妖怪学の復興や梅原猛などの伝統回帰志向などを通じて日本の宗教性の優位を誇るような言説が量産された(『現代日本のスピリチュアリティ』、二〇一三)。これらは日本礼賛論やオウム真理教を優待する潮流を形成し、現在のスピリチュアル・ビジネスまで連結する。

しかし、スピリチュアリティの可能性についても議論されている。堀江宗正が整理しているように、何らかの「他者性」に触れることで潜在的な自己を解放し、理想的な自己の実現を目指すスピリチュアリティの運動は心理学的思想運動やスピリチュアル・ケアなどに展開し、水脈を保っている(『歴史のなかの宗教心理学』、二〇〇九)。個を抑圧せず、個を超えた「他者」と新たな関係を結ぼうと

する超宗教の主張やトランスパーソナル心理学の運動は、これまでの共同体やそれを成立させてきた宗教や国家の閉鎖性を批判的に問い直し、新たな関係性を構築するひとつの契機を与えていると捉えることができるだろう。

このようなスピリチュアリティに関わる問題は幾つかの観点から問い直すことができるが、本パネルでは文学を中心とする表現文化に焦点を定める。戦後のスピリチュアリティの社会的文脈の系譜を考察し、各時代の展開や展開の条件となる社会的な基盤を問うことを目的とする。スピリチュアリティ文化は文学において様々な表現され、特撮映画やアニメなどのサブカルチャー領域にも確認される。また松井剛が指摘するようにケアや癒しにはジェンダーによる差異が存在するため、ジェンダーの観点からも考察することが必要である(『ことばとマーケティング』、二〇一三)。本パネルでは、戦後の文学・映像表現を対象に、新たな共同体や関係性の構築を模索するものとしてスピリチュアリティを捉え直し、テクストに表象された宗教・国家・都市・家族などの社会的諸関係のありかたを、同時代の諸言説と突き合わせながら、

新たな「他者」との関係の再構築としてこの問題の問い直しをはかる。

木下幸太は『モスラ』（本多猪四郎監督、一九六二）を取り上げる。原水爆の脅威や当時の社会情勢を反映している点は『ゴジラ』（一九五四）と同様だが、モスラは架空の鳥で人間を守護する神としても描かれており、本作で人類とモスラとの共生の物語が祈りや歌によるスピリチュアリティを通して語られることに注目する。また、原作の中村真一郎・福永武彦・堀田善衛『発光妖精とモスラ』も踏まえて、戦後作家が映画や特撮という新しい表現空間を意識して共生の物語を構築したことへの解釈も行う。

加島正浩は、荒俣宏『帝都物語』（一九八五―一九八九）を取り上げる。本作には風水や陰陽道などの東洋思想、神智学や魔術といった西洋オカルティズムなどが細部にまで配置され、満州や大東亜共栄圏に至るまで広範な射程を持つ。オカルティズムによって都市や人々の関係性が組み替えられていく箇所に着目し、ニューアカデミズムや工作舎に代表される時代の潮流や一九六〇年代以降に登場する所謂「魔的なものの復活」との関係などを

視野にいれながら、一九八〇年代の近代批判と関わるスピリチュアリティのあり方を明らかにする。

泉谷隆は、津村記久子「サイガサマのウィットカーマン」（二〇一二）を取り上げる。神秘的な題材を青春小説の枠組みで語る本作は、地方都市の停滞感や若年層の学費問題をも背景としながら、「家族」に代表されるような従来の関係性とは異なるものを並行して構築する試みであり、その基点に日常的な信仰や祈りといった営みが置かれている。本発表では、信仰対象の神である「サイガサマ」をはじめとした、登場人物たちの「無力」なありさまが引き寄せていく他者との関係性を分析する。そこより、二〇〇〇年代以降の日本社会におけるスピリチュアルな概念がもたらす可能性の一端について、主にジェンダーの観点から解き明かしたい。

本パネルのディスカッションは柳瀬善治が担当する。

第二会場（15B教室）

個人発表

一九六六年遠藤周作『沈黙』から
一九七〇年大阪万博への道程

増田 斎

遠藤周作『沈黙』は一九六六年三月、書き下ろし長篇として刊行された。本作は隠れキリシタンと踏絵を題材にしており、「キリスト教会では一部批判され、禁書扱いにされた」作品として、作家の公式年譜に記されている。そのような作品の「位置」に則って、先行論では作中人物及び作家の宗教的思想に対する解釈に焦点が当てられてきた。本発表では、従来の作品の「位置」自体を問題の射程に入れ、刊行当時の一九七〇年前後の日本という時代的文脈に作家と作品を再配置することを目的とする。とくに焦点を当てるのは、『沈黙』の刊行と一九七〇年大阪万国博覧会に出展されたキリスト教館というパビリオンとの関係

である。

大阪万博はアジア最初の万国博であり、開催年である一九七〇年は日本の近代化からほぼ一〇〇年にあたる等の理由から開催が承認された。だが、開催年が安保条約改定の時期と重なっている点等から、一部で万博反対運動が勃発し、とくにキリスト教館に対してはプロテスタントの教派の中で問題となった。

キリスト教館とはカトリック・プロテスタントの合同事業によってなされたものであり、キリスト教の教派ごとに展示を分けずに出展するのは万国博では初の試みであった。このプロデューサーとして関与していたのが、キリスト教信仰を持つ作家である。カトリックから遠藤周作、プロテスタントから阪田寛夫、両者の関係者でありカトリックである三浦朱門が抜擢され、一九七〇年一〇月にはその功績をたたえるためにローマ法王庁よりシルベストリ勲章（騎士勲章）が授けられた。

『沈黙』と『禁書扱い』が結びつけられることは、作家・作風のイメージ形成に多大なる影響を及ぼしたのであろう。それにもかかわらず、わずか四年という短い年月の間で、カトリックの「絵本山」で功績を認められてい

るのはなぜか。プロデューサーへ抜擢されたのは『沈黙』が影響していたことを論証し、その関係性について考察したい。

中上健次「火宅」における同一性をめぐる語りと父の形象

亀 有 碧

「火宅」は、一九七五年に中上健次によって発表された短編小説である。本作はこれまで、後年の作品にたびたび主題化される焦点人物〈彼〉の離別した実父をはじめ詳しく描出していることに注目が集まりつつ、実父が死に瀕していると知った〈彼〉に焦点化する語りと、実父について語る母たちの伝聞や兄に焦点化した語りからなる複雑な構成を批判されてきた。

しかし、この一見混乱した構成には、ある一貫した規範が働いている。それは指示詞等の特定の文体上の指標が、〈彼〉に焦点化した実父語りが他者による実父語りを前提すると示すことである。すなわち本作は、複数

の異なる語りをたんに並置するのではなく、〈彼〉に焦点化した語りのみを、その他の語りとそこで語られる実父という対象から差異化し、それらに従属させる語りの境界線を確定し、その越境の不可能性と欲望を示すのである。言葉とそれに語られる対象との同一性の喪失というコンセプトは、物語内容における〈彼〉と実父の関係と結びついている。他の語りの前提を顕著に示す「その男」という呼称で〈彼〉に呼ばれる実父は、かつて〈彼〉との見つめあいを拒まれたことで〈彼〉の自己同一性を担保しえなくなった者として語られているからだ。

本発表では、まず本作の構成と実父の描出を再検討し、本作の主題を語りと存在における同一性の喪失——正確には、喪失されたものとしての同一性の仮構と定位する。その上で、作品末尾における「火つけ」の場面を、物語言説における規範の侵犯と物語内容における象徴的意味の両面から意義づけたい。ここでは、〈彼〉に焦点化する語り手がこれまで伝聞されてきた過去の時間に入りこんで、実父の内面を語ることで、同一性の喪失を無化するかなような語りが出現する。本発表は

そうした、実父を介して同一的主体という効果を生産するテクストの構造を明らかにすることで、本作の語りの到達点を見定めるものである。

消えていく〈記憶〉に接触すること

——目取真俊「群蝶の木」論

栗山雄佑

本発表では、目取真俊が二〇〇〇年に発表した「群蝶の木」を取り上げる。発表は、作品が描く戦時性暴力に接近した人物に生じた感情の点に注目を当て、沖繩における性暴力と文学の関係に本作品がもたらした視座を明らかにするものである。

目取真は、作品にて主人公の義明とゴゼイという元慰安婦の女性との接触を通じ、沖繩内の正史の中から零れ落ちて、いる性暴力の記憶の消滅と継承の可能性を問題とした。それは、作品の主人公である義明が、自身に「ショーセイ」と呼びかけるゴゼイの姿や身体への接触を通じて、自己の内奥に名状しが

たい感情を生起させることとして描かれる。ただし、両者の接触の中で、義明に対しゴゼイの記憶は直接継承されない。しかし、発表者は一見成立していない両者の交流を通して、義明がゴゼイの像を周囲から見聞した話と彼女に触れた際の自身に生じた感情を融合することで、戦時性暴力の記憶に対する新たなアプローチが生まれたと考える。

発表では、この感情を中心とした戦時性暴力の記憶の伝達可能性について、義明の動きに即して考察を行なう。第一に、ゴゼイと義明の出会いの中に内在する攪乱の意味を明らかにする。先行論は、豊年祭の出し物を沖繩内に関する歴史イメージの再演とし、これが沖繩内の加害の歴史を除外したものであることを指摘する。これを踏まえつつ、ゴゼイが義明に接近し自身の記憶に引きずり込む行為から、彼女の不可視の記憶への回路が義明へ開かれた企図を読み取る。第二に、義明に生じた感情を、戦時性暴力に関する記憶の伝達の問題として考える。義明はゴゼイの感触、記憶から、彼女の被害が自身の状況へ連続することを発見する。二つの観点から文学や實際の聞き取りといった言語化されたものとは

異なる接触を伴う伝達が文学として再還元されることを、戦時性暴力と文学を巡る議論を踏まえつつ、ゴゼイの記憶が義明の言葉によって伝達する可能性の提示と位置づける。

パネル発表

「文化資源」としての『伊豆の踊子』

——小説・映画・文学碑——

西村 峰龍・今井 瞳良

藤田 祐史

(デイスカッサント) 仁平 政人

ある作品の舞台になった場所を観光する現象があり、作品のなかで作中人物が観光する現象があり、作家もまた、観光という現象と関わり合いながら創作することがある。文学と観光の間には多種多様であり、文学から離れても近年のアニメーション作品の舞台を巡る「聖地巡礼」の現象や、それに応じた町おこしなど、創作作品と観光の結びつきは緊密かつ発展型の問題でもある。

本発表の大きな目的はそうした文学と観光の関係を考察することであり、その例として「川端康成と伊豆」という長きに渡って作品と観光の関係を進展させてきた関係を扱い、文学碑、映画、「伊豆の踊子」というテクストという発表者それぞれの注目点から考察する。

具体的には、西村峰龍は、静岡県伊豆市の複数の文学碑を考察する。文藝同人誌や文藝誌、書籍などは誰もが手にすることは出来るものの実質的には文学的知識量に立脚した特定の読者層を念頭に置いているメディアである。だが、文学碑は雑誌メディアと違い、文学的知識量の多少を超えて、不特定多数の観光者が来訪するという特徴を持つ。このような文学碑自体のメディアとしての機能に着目し、何故、「伊豆の踊子」関連文学碑が観光地として特権化されたのかを明らかにする。

今井瞳良は、「映画『伊豆の踊子』が描いた旅」という題目で「伊豆の踊子」の六度にわたる映画化作品の「旅」の場面を比較検討する。これまで「伊豆の踊子」の映画は、原作との関係や「踊子女優」と呼ばれる踊子を演じた女優に関心が向けられてきた。しかし、

「旅」の観点から六作を眺めてみると、原作や女優だけでなく、監督や制作会社、技術などがそれぞれの作品に与えた影響が見えてくる。例えば、サイレントだった最初の映画化で天城峠を越える「旅」のシーンは大きく省略されているが、主題歌の歌詞がスーパーインボーズされる場面で、伊豆の景色を取り込んでいる。また、二度目の映画（一九六〇年）で、前二作と比べて「旅」のシーンが大幅に増えたのは、当時テレビとの差異化を目指して開発・導入されたワイドスクリーンの影響を抜きにしては考えられない。それぞれの作品に描かれた「旅」の場面を比較検討することで、「文化資源」としての「伊豆の踊子」が映画という媒体でどのように活用されていったのか明らかにする。

藤田祐史は、「伊豆の踊子」の「死後の生」を読む——「天城越え」と推理小説」という題目で、松本清張「天城越え」を中心に、推理小説による「伊豆の踊子」活用の子細を追う。ある作品の「再利用」の現象は、本歌取り、翻案、アダプテーション、二次創作など、様々な論点で議論される領域であるが、本発表では「伊豆の踊子」に対し、「純文学」「青

春の書」といった価値ではなく、別の価値を発見・利用してきた例として、推理小説を扱う。その際に、例えば「松本清張の意図」という作家の視点に留めず、あるジャンルがいかに「伊豆の踊子」を「資源化」しているのか、そこに働いている諸力についてジャンルを視点に捉える。また、単純に小説「伊豆の踊子」と対比するのではなく、映画、観光ブーム、峠という場所など、複数の要素の重なり合う「資源化」の過程を考察する。最終的に、「死後の生」（ベンヤミン）を視点とする「伊豆の踊子」の読解を提示したい。

各発表者は、同じ作家、同じ場所を対象としているが、必ずしも、その結びつきについて、統一された見方を提示するものではない。しかし、その統一されないありかたこそが、文学と観光の関係の多様性であるという見方においては一致していると信じている。

第三会場（15C教室）

個人発表

山川登美子の目覚め

——『花のちり塚』裏表紙不明文字の判
読から——

前 田 敬 子

山川登美子の自筆稿本『花のちり塚』裏表紙の不明文字を「明治三十三年より」と読み取ることができた。

従来「花のちり塚」は明治三十八年元日の『恋衣』刊行少し前に元資料から「編まれ」「まとめて書かれた（「清書」の意）」と考えられてきた。だが、判読された文字は、従來說より早い明治三十三年から、稿本に「随時、書き継がれた」可能性を示唆する。

①登美子の『詠草』『おもかげ草紙』と同様、後部に空白ページが大量に残ること、②四百を超える歌数のうち三首が重複すること、③集の意義を示す冒頭歌の書き足しが明らか

こと、④「明治三十三年より」の変体仮名「与利」の「利」の登美子の用例は明治三十三年に見られるものであることも、随時の書き継ぎを裏付ける。

更に「花のちり塚」の筆録態度が途中で変化することも、稿本自体への随時の書き継ぎを裏付ける。初期投稿歌は（漢字平仮名表記を除き）雑誌掲載に忠実に書かれている。だが、三十三年七月頃から登美子は、掲載の形や掲載如何に関わらず、自らの基準で書いている。しかも同時期、「歌えないなら今すぐ消えたい」「自分亡き後、うた塚が残ればよい」という趣旨の歌を残している。

つまり、外側の権威に拠らない『花のちり塚』の筆録態度は、歌人としての精神の独立、歌に生きる覚悟の現われである。このことは先に、『花のちり塚』が『明星』掲載や『恋衣』『白百合』収録歌に拠らず、原形の記録であることを確認した内容（拙稿）とも符合する。

『花のちり塚』が投稿初期の歌から始まることは、外から評価され掲載される作者像と内的な自己像との乖離が、その筆録動機であることを示すのではないだろうか。冒頭歌が書き足されたのは、明治三十七年に『恋衣』

編纂が決まって後、編纂資料として鉄幹に差し出す際に必要となったためであろう。現存する『花のちり塚』冒頭歌が落書き風練習風の筆跡であるのは、別の清書本を鉄幹に渡し、ためと推測する。

〈小説作法〉の生まれる場

——明治期における小説作法書の

成立——

山 本 歩

「小説の書き方」「作家になるには」「文学賞をとる方法」——かようなタイトルを掲げた「ハウツー本」は、今日も出版され続けている。それらは「小説」という文化と、アマチュア文化の参加者たちとを繋ぐ役割を持つが、研究・評論シーンではさしたる注意を払われていない。それはこれまでの研究史においても同様であり、明治・昭和期の〈小説作法〉を評価する枠組みは存在しない。本研究はそうした〈小説作法〉研究の一環として、明治期の〈小説作法〉の成立過程を見出すも

のである。明治中後期に盛んに出版された文
 範集・作法書の類は、美文・記事文等の一分
 類として小説に言及しながら、小説専門の作
 法書登場を準備した。とはいえそうした連続
 性を有しながら、小説作法書は文範集からの
 飛躍、既存の文章ジャンルへの反発を演じる
 ことで独自性を主張していくこととなる。先
 駆的な小説作法書は落合浪雄『着想描写 小
 説著作法』(一九〇三年)だが、これは事実上、
 G.Richards『How to Write a Novel』(一九
 〇一年)の翻訳であった。日本文章学院『小
 説作法』(一九〇六年)が「理想」「詩趣」を
 中心に基本的な作法を整備した同時期、田山
 花袋『美文作法』(一九〇六年)および生田
 星郊(長江)『明治時代文範』(一九〇七年)
 は既存の文章ジャンルや文章作法に疑義を唱
 え、小説の特権性を主張した。これらは逸脱
 的ではあったものの、「小説作法」は必ずし
 も作法書の置かれた状況に反旗を翻している
 ばかりではない。修養主義的な言説を見れば、
 むしろ踏襲の様相さえ伺える。「通俗」的で
 あるために、解体と踏襲のバランスを探るの
 がこの時期の「小説作法」だったと考えられ
 る。雑誌「文章世界」での小説指導を経た田

山花袋『小説作法』(一九〇九年)はその内
 容的充実のみならず、大胆さと慎重性を含有
 している態度において、明治期(小説作法)
 の結実だと言える。

「小説」というメディア

——徳富蘆花の「小説の小説」論

権 丁 照

本発表は、明治二十六(一八九三)年『国
 民新聞』に掲載された徳富蘆花の「小説の小
 説」(七・二〇八・十三)を対象とし、「小説」
 というメディアの問題系を軸として、テクス
 トの特質と意義を考察したものである。
 初出の際に、「〇〇〇生訳」と記された「小
 説の小説」は、翌年、『第四国民小説』に、「物
 語の物語」と改題され、「秋山生」という筆
 名で収められた。これまで、「小説の小説」
 が徳富蘆花の著作目録に挙げられてからも、
 ほとんど論じられることはなく、明治前半期
 の日本に置き換えられた「訳」の原作は未だ
 に明らかにされていない。このような研究の

制約を抱えながら、本発表では「小説の小説」
 を分析対象として、テクストを「小説」とい
 うメディアから照射する意義を探りたい。と
 いうのは、作者・出版・読者という「小説」
 の生成と受容の全領域を焦点化した「小説の
 小説」は、「小説」をその叙事内容としてで
 はなく、伝達媒体としてのメディアのコミュニ
 ケーションの形態から捉えていると言える
 からである。まさに、マーシャル・マクルー
 ハンがいう「内容の透明な伝達ではなく、メ
 ディアの形式に注目し」たメディアを想起さ
 せる。従って、本発表では、「小説の小説」
 の稀有の叙事性に着目して、テクストにお
 ける「小説」という語の含意を考察しつつ、
 受け手によってそれぞれ異なる形で物語られ
 る「小説」のジャンルと出版文化が関わるメ
 ディアの諸問題を分析する。

本発表における「小説」というメディアの
 問題系は、「小説の小説」から「物語の物語」
 への改変を含めて、一九一〇年代の植民地朝
 鮮で、梁建植の「帰去來」と白大鎮の「小説
 の小説」という二つの作品に変奏された「小
 説の小説」の受容に通底する、さらなる展開
 を見渡す構図となり得ることが期待される。

パネル発表

文学研究と言語研究のインタール
フェイス

西田谷 洋・中村 三春
橋本 陽介・浜田 秀
(デイスカッサント) 小澤 純
(司会) 服部 徹也

日本近代文学研究に「言語論的転回」がもたらされたといわれて久しい。しかし、それは「言語学」を密かに迂回してはいなかったか。福沢将樹『ナラトロロジーの言語学』（ひつじ書房、二〇一五）、石出靖雄『漱石テクストを対象とした語り言語の研究』（明治書院、二〇一六）等の成果が相次ぐ現在、改めてそう問い直してみたい。本パネルは認知文

研究の接合面を検討する。

橋本陽介は、日本語小説における時間と視点（話法）に関する分析を提示する。これによっていかに日本語のテクストが構成されているのかを明らかにする。小説は言語の芸術であり、その研究は広く人間言語の研究の一環としても捉えることが可能である。しかしながら、現代においては言語学の研究と文学の研究は分断されている。ナラトロロジーの登場以降、日本文学でもテクスト分析が行われるようになったが、言語学の成果を参照しているものはまれである。言語の分析をするのであるから、言語学を参照にすれば、よりよい分析が可能になるはずである。一方、言語学の方でも、小説言語は例外的なものとされ、あまり顧みられていない。小説言語の分析から、逆に言語学の理論を変更することも可能であるとの展望を示し、今後明らかにすべき問題について言及する。

橋本が時間と視点に注目するのに対し、西田谷洋は、空間メタファーと視点について検討する。物語論は言語学と文学の接点として文学研究においてもっとも言語研究の成果を導入してきた領域である。さて、認知言語学

は認識者・表現者が対象をどう捉えているかを重視するが、レイコフの認知意味論やギブソンの生態心理学では身体と環境の相互作用・相補性に注目する点で、本多啓のように捉えたものをいかに提示するかという問題意識が立ち上がる。ジュネットの物語論で峻別される視点／語りはそれに半ば相当するラネカーの認知文法概念化者／話し手が比較的癒着しやすい点で、視点と語りを接続して捉えたものをいかに提示するかという理論構成も考えられよう。たとえば、村上春樹には対立・重層化する世界を「メタファー」で接続することを明示する小説が最新作『騎士団長殺し』を含め複数存在する。そうした視覚・空間メタファーによっていかなる物語世界が構築されるのか、またその物語表現において視点ないし主観性はどうか提示されるのかを検討したい。

中村三春は、「語り手・人称・主体と複合的小説構造」と題し、語り手も既に媒介されているとする観点から、物語における人称・焦点化と主体との関わりを再検討し、さらに語り手の交替、焦点化の遷移、メタナラティブの導入などを含む物語状況の変化、もしく

は複数の物語状況を混在させた小説における語りの問題を考えてみる。「彼岸過迄」「星座」「死の島」「優雅で感傷的な日本野球」などにおいて、物語の主体は一つなのか複数なのか、そもそも主体とは何か。中村「作家／作者はなぜ神話化されるのか―文芸解釈の多様性と相対性―」（関西支部編「作家／作者とは何か」、和泉書院）の問題意識の延長線上に、野村眞木夫「スタイルとしての人称」、福沢将樹「ナラトロジの言語学」などを参酌し、「上海」「道化の華」「紋章」「人質の朗読会」その他、複合的構造の小説を鑑賞する理論を、言語学にも学んで展望する。

ところで、文学作品の解釈・鑑賞はテキスト内部の要素からのみ構成されるものではない。文学史は往々にして作品の集積として語られる。しかし、作品の創出と受容を可能にするのはその背後にある制度である。そこで浜田秀は「詩」ジャンルの発生・消失を、ジャンル名の制度的分析を通して検討する。ジャンルとは制度的存在であり、作品の創造と受容にはこの制度が介在する。サールは制度の本質を構成的規則によって生成されるものとしてとらえたが、ここではジャンル分析の手

がかりとして「書名」「目次」にふくまれる「ジャンル名」という言語現象に注目する。これらベリテキストは、後続テキストのジャンルの置かれるべき空間を創出している。以上をふまえ、日本近代文学における「詩」の各ジャンルの消長を、サールの社会的存在論、認知文法論のネットワーク理論、認知意味論を援用しつつ、コーパスによるジャンル名調査を通じて明らかにする。

以上の発表に対し、デイスカッサントを小澤純、司会を服部徹也が務め、来場者を含めた討議を行う。

第四会場（55C教室）

個人発表

戦前・戦中期の『少年倶楽部』における海外児童文学の受容

森下 達

一九二〇～三〇年代、児童層に特に人気を博した雑誌に大日本雄弁会講談社の『少年倶楽部』がある。日本人作家の手になる冒険譚が連載されていたイメージの強い同誌には、実は海外児童文学の翻案も数多く掲載されていた。背景には、おそらく、興文社・文藝春秋「小学生全集」（一九二七―二九年）とアールズ「日本児童文庫」（一九二七―三〇年）といった、円本ブームが生んだ同時代の児童全集の存在があっただろう。結果『家なき子』（一八七八年）や『フランダーズの犬』（一八七二年）など、孤児として貧しい生活を送りながら、精神的な善良さを保っている主人公が道徳的に正しいふるまいをする一九

世紀児童文学が、『少年倶楽部』の誌面を飾ることになった。

こうした動きは、日本人作家による創作にも繋がっていく。たとえば豊島与志雄は、ヨーロッパを舞台に遍歴する少年を主人公に据えた『エミリアンの旅』（一九三二年）を連載している。また、『少年倶楽部』最大のヒット作と目される田河水泡の漫画『のらくろ』（一九三一—四一年）でも、主人公ののらくろは捨てられた子犬だと設定されており、作中には彼が自身の身の上を慨嘆する描写が見られる。猛犬連隊に入隊し、仲間とともに活躍するのらくろの善性は、彼が孤児であるという設定によって強められているのである。

これら、『少年倶楽部』を舞台とする海外児童文学の受容と、その影響下で書かれたとおぼしき日本人作家の創作の双方を検討するのが、本発表の内容となる。このことを通じて、戦前・戦中期の児童文化の中に、「無垢な子ども」を重んじる一九世紀児童文学的感性がいかに取り入れられていったかを考えていきたい。しばしば、大正期の『赤い鳥』などで見られた児童善導主義とは対極にあるものとして語られる『少年倶楽部』だが、どの

ような子ども像があるべきものとして提示しているかに着目したとき、両者の連続性も見てくるだろう。

司馬遼太郎『坂の上の雲』論

——雑誌『中央公論』をめぐる——

轟原麻美

一九四五年、敗残兵となった司馬遼太郎は京都の古書店で古本の『中央公論』を多量に買い求め、それを通じて「自分が生まれて、経た時代」を知ろうとした（『司馬遼太郎が語る雑誌言論一〇〇年』、一九九八）。司馬にとって『中央公論』は時代を象徴する雑誌だったと言っている。

一九六三年頃から、『中央公論』では「大東亜戦争」に関する論評が盛んに掲載されるようになる。ここでは「大東亜戦争」を顧み論じる過程において、日清・日露戦争にまで遡っての追究が行われていた。その最中、司馬は、「大東亜戦争」終結まで日本人が持っていた「良質の遺伝子」が何たるかを追究し

たいと表明する（『百年の単位』、『中央公論』七九卷二号、一九六四二）。そしてこの時期は、日清・日露戦争を舞台とした長編『坂の上の雲』（『産経新聞』夕刊、一九六八・四・二二—一九七二・八・四）執筆の準備期間でもあった。論壇での「大東亜戦争」の問い直し、失われた「良質の遺伝子」の追究宣言、『坂の上の雲』の執筆準備期間が同時期に重なることは注目すべきだろう。

『坂の上の雲』には、『中央公論』からの影響と思われる箇所が散見する。まず、日清戦争について、司馬は「多分に受身」な戦争だと述べるが、これは『中央公論』に掲載された上山春平「大東亜戦争の思想的意義」（七六卷九号、一九六一・九）や大井魁「日本国ナシヨナリズムの形成」（七八卷七号、一九六三七）等の見解と一致する。

また司馬は『坂の上の雲』において、歴史を両極端に捉える当時の歴史科学のあり方を、「善玉」「悪玉」という言葉を用いて批判している。この用語は一般的なものだが、先の上山もまた同じ言葉を用いて日本人の戦争史観を検討しており、両者の論評は方法論的に酷似する。

このように、『中央公論』における「大東亜戦争」に関する論評が、『坂の上の雲』のテキストに多分に影響を与えていることが指摘し得るのである。

入会手続き・会費納入等についてのご案内

○入・退会の手続き、住所・所属などの変更、その他会員としての通知や連絡は、左記の特定非営利活動法人「お茶の文学術事業会」日本近代文学会係宛にお願いいたします。

○入会の場合は、お茶の文学術事業会へ連絡すると申込書が送られてきます。入会届に記載する推薦人の姓名は必ず、自署でお願いいたします。

○退会の場合は、その旨を葉書でお届けください。

特定非営利活動法人・お茶の文学術事業会

「日本近代文学会」係

〒112-8610 東京都文京区大塚二―1―1

お茶の水女子大学 理学部三号館二〇四号室

電話・ファックス 〇三(五九七六)一四七八

メールアドレス anjis-info@npo-ochanomizu.org

○会費、機関誌購入代金などは、左記の郵便振替口座にお振込みください。

記号・番号 00140-1-260401

加入者名 日本近代文学会